

平成 22 年 4 月 1 日現在

研究種目：若手研究 (B)
 研究期間：2008 ～ 2009
 課題番号：20791720
 研究課題名 (和文)
 ベッド上安静妊婦の心理社会的適応状態と肯定的側面に焦点を当てた体験
 研究課題名 (英文)
 Psychosocial adaptation status and Positive experiences for Bed-rest pregnant women
 研究代表者
 中村 康香 (NAKAMURA YASUKA)
 東北大学・大学院医学系研究科・助教
 研究者番号：10332941

研究成果の概要 (和文)：

1 週間以上持続点滴をしている切迫早産妊婦 185 名を対象に、妊娠の受けとめ、心理社会的適応状態、入院生活の肯定的側面について、半構成的面接と質問紙を用いて調査した。結果、妊娠の受けとめでは 17 カテゴリ、入院生活の肯定的体験では 10 カテゴリが認められた。また心理社会的適応状態では妊娠の受容と出産への準備に対する適応状態が低かった。以上より、妊婦がより快適な入院生活を送れる看護介入プログラムの開発が望まれる。

研究成果の概要 (英文)：

One hundred and eighty-five pregnant women who were hospitalized by preterm labor and continuation intravenous drip for 24 hours answered about recognition of their pregnancy, state of psychosocial adaptation, and positive experience in a hospital by semi-structured interview or questionnaire. The result of that, it derived 17 categories for acceptance of pregnancy, and 10 categories for positive experience in a hospital. Two subscales of Prenatal Self-Evaluation Questionnaire, which were acceptance of pregnancy and preparation for labor, showed low adaptation. Based on those result, developing of a nursing intervention that promote comfortable maternity life in a hospital were expected.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2009 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：ウィメンズヘルス看護学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：肯定的体験、切迫早産、妊婦

1. 研究開始当初の背景

近年、女性の出産年齢の高齢化や食生活の変化などを背景としハイリスク妊婦は増加してきている。「健やか親子 21」の重要課題の

一つに「妊娠・出産に関する安全と快適さの確保と不妊への支援」が掲げられ、周産期ネットワークシステムの充実や妊娠・出産に関わる QOL の向上が求められている。ハイリ

スク妊娠の妊婦は妊娠期に入院をする場合も多く、入院によりベッド上安静を強いられることとなる。妊婦のベッド上安静による身体的、心理的、社会的にストレスフルな影響はすでによく知られている(Maloni, 1993; Mackeyら, 2000;など)。そのような快適とはほど遠い環境下で妊婦は、ベッド上安静を伴う入院生活に適応して行かなければならない。また同時に、妊娠そのものに伴う心理社会的なさまざまな変化にも適応していかなければならない(Lederman, 1996)。これまで、妊娠経過に異常が認められ入院、ベッド上安静を強いられた妊婦の体験を横断的に調査した研究はいくつかあるが不安や恐怖といった否定的側面のみに着目している体験が多く(Maloni, 2006; 蓼沼ら, 2005)、また会議録にとどまっている(小陽, 2004; 坂本, 2006; 平石, 2007)。ベッド上安静を強いられた妊婦がその入院生活の中で妊婦としてどのような肯定的体験をしているのか、さらに、どのように妊娠を受けとめているのかという、妊娠の肯定的側面や妊娠の心理社会的適応に着目し、ベッド上安静妊婦の体験を明らかにしている研究はない。これらを明らかにすることで、時には妊娠を否定的に受け止めたり、自身に罪の意識を感じてしまうベッド上安静妊婦に対して、肯定的に妊娠を受け止め、その妊娠経過に適応し、快適な妊娠生活を送るための看護援助を考えることへとつながる。さらには、研究者が行った正常な妊娠経過をたどった初産婦を対象とした看護介入を踏まえ、ベッド上安静妊婦の妊娠の適応を高める看護介入プログラムの作成へと発展していくものである。

2. 研究の目的

- (1) ベッド上安静妊婦がその妊娠経過においてどのように自分の妊娠を受け止めているか心理社会的適応状態を明らかにする。
- (2) ベッド上安静妊婦の妊娠経過における体験を肯定的側面に焦点を当て、明らかにする。

3. 研究の方法

- (1) 研究デザイン：記述的調査研究デザイン
- (2) 研究対象者
 - ① 面接調査：ベッド上安静妊婦 10 名程度
 - ② 質問紙調査：切迫早産で入院をしており、安静度の制限がある妊婦 100-200 名程度
- (3) 研究協力施設：産科入院を扱う診療所 2 施設及び病院 5 施設
- (4) データ収集内容と方法
 - ① 面接調査
半構成的面接法、30~60 分
 - ② 質問紙調査

J-PSEQ (日本語版妊娠期自己評価質問紙)

VAS (主観的快適さのビジュアルアナログスケール)

日本語版新版 STAI (特性・状態不安尺度)

SF-36v2® Acute 版

妊娠の受けとめと入院中の体験の自由記述

基礎情報 (妊婦の年齢、家族構成、夫の年齢・職業、学歴、職業、婚姻状況、妊娠の計画性、子どもの希求願望、妊娠週数、入院日数など)

- (5) データ収集機関
倫理審査承認後～平成 21 年 12 月
- (6) 倫理的配慮：研究機関及び研究協力施設の倫理審査委員会の承認を得て実施
- (7) 分析方法
 - ① 質的データ：質的内容分析[Hsieh Shannon, 2005]に基づき分析
 - ② 量的データ：SPSSv17.0J を用いて統計学的に分析

4. 研究成果

(1) 対象者の背景

面接調査の最終的な分析対象者は 24 時間持続点滴をして 1 週間以上入院している、初産婦 5 名、経産婦 5 名、合計 10 名に行った。平均年齢は 30.6(±5.02)歳であり、単胎を妊娠しているものが 7 名であった。入院病日は、入院日を 0 日とし、平均 19.1(±14.6)日であり、その時の妊娠週数は、平均 30.9(±4.21)週であった。9 名が結婚しており、核家族が 8 名であった。不妊治療があったものが 3 名、人工妊娠中絶の既往があったものが 2 名含まれた。

質問紙調査は、合計 246 部配布し、215 部回収でき回収率 87.4%であった。そのうち、24 時間持続点滴治療を 1 週間以上しているもの 185 名のみを最終的な分析対象とした (有効回答率 75.6%)。

平均年齢は 31.3±4.6 歳(20-43 歳)、そのうち調査時点での有職者は 92 名(49.7%)であった。初産婦が 109 名(58.9%)、経産婦が 76 名(41.1%)であり、単胎を妊娠しているものが 164 名(88.6%)であった。入院病日は平均 18.7±14.7 日(7-96 日)であり、その時の妊娠週数は、平均 30.5±4.2 週(17-37 週)であった。179 名(96.8%)が結婚しており、核家族が 154 名(83.2%)であった。不妊治療があったものが 28 名(15.1%)、自然流産や人工妊娠中絶の既往があったものが 69 名(37.3%)含まれた。

(2) 妊娠の受けとめ

妊娠の受けとめでは、肯定的受けとめとして、【うれしさと感動】、【母親とわが子の実感】、【付き合っていけそうな妊娠】、【妊娠に

よるメリットを実感】、【人生の糧となる体験】、【家族とのつながりを実感】、【出産を意識】、【感謝の気持ちを実感】の8つのカテゴリ、両価の受けとめとして、【妊娠の喜びと不安】、【妊娠の現実感と非現実感】、【妊娠の喜びとつらさ】、【妊娠継続と早期終了】の4つのカテゴリ、否定的受けとめとして、【拒否したい妊娠】、【予想と異なる妊娠】、【他人事の妊娠】、【不安だらけの妊娠】、【自分への負担がある妊娠】の5つのカテゴリが認められた。

(3) 入院中の肯定的な体験

入院中の肯定的な体験として、【基本的ニーズが満たされた快適さ】、【健康な状態に向かう快適さ】、【身体的変化から得られる快適さ】、【精神的な快適さ】、【人生の意味としての快適さ】の5つのカテゴリが認められた。胎児との関係における快適さの側面としては、【母親になっていく快適さ】、【わが子がいることによる快適さ】の2つのカテゴリが認められた。そして、他者や環境との関係における快適さの側面としては、【周りの環境から得られる快適さ】、【周りの人からの支えにより得られる快適さ】、【人との関係性が深まることによる快適さ】の3つのカテゴリが認められた。

(4) 主観的快適さ

平均値は、 51.6 ± 23.9 、範囲は0-100であった。図1に度数分布を占めす。

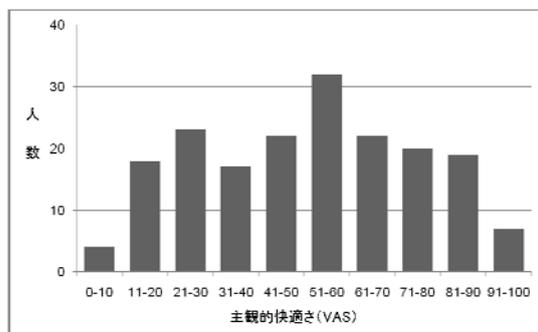


図1 主観的快適さの程度

(5) 心理社会的適応状態

表1 J-PSEQ 得点(n=185)

	平均±SD
妊娠の受容	23.0±5.20
母性役割の同一化	21.5±5.56
母親との関係	16.8±5.66
夫との関係	12.6±4.16
出産への準備	21.0±4.42
痛みの恐怖・無力感・コントロールの喪失	19.7±4.30
自分自身と赤ちゃんの状態についての心配	18.5±4.90

(6) 特性・状態不安

表2 STAI 得点(n=185)

	平均±SD
状態不安得点	49.1±9.4
特性不安得点	44.3±10.9

(7) 健康関連 QOL

表3 SF-36v2® Acute 版得点 (n=185)

	平均±SD
BP(0-100 得点)	56.7±24.4
GH(0-100 得点)	64.3±18.5
VT(0-100 得点)	48.1±21.3
SF(0-100 得点)	45.5±29.5
RE(0-100 得点)	56.0±31.7
MH(0-100 得点)	53.3±22.7

心理社会的適応状態では、妊娠の受容と出産への準備に関して、先行研究【岡山 高橋, 2002】のローリスク妊婦よりも適応状態が有意に低く($p < 0.05-0.01$)、夫との関係に関しては、適応状態が有意に高く($p < 0.05$)、有意な差は認められなかったものの、母親役割の同一化に関しても、適応状態が高い傾向($p = 0.05$)が認められた。また、状態不安得点は、先行研究における標準的な女子大生【肥田野, 福原, 岩脇, 曾我, Spielberger, 2000】よりも有意に高い得点($p < 0.01$)となった。健康関連 QOL においては、一般的な女性と比較し、GHを除く、BP、VT、SF、RE、MHの下位尺度について有意に低い得点($p < 0.01$)であった。

以上のことから、入院中の切迫早産妊婦は、不安やストレスといった否定的側面の体験だけでなく、妊婦ならではの、また入院中ならではのさまざまな肯定的側面の体験もしていた。夫との関係や母親役割の同一化といった側面については入院環境の中でも十分に適応状態が促されており、むしろ、妊娠の受容や出産への準備といった側面について重点を置いた看護援助を、不安を軽減する援助とともに進めていくことが重要である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計2件)

1. 中村康香、吉沢豊子、跡上富美、入院妊婦と外来通院妊婦との快適さの体験の比較、第50回日本母性衛生学会学術集会、2009.9.26-27、横浜
2. 渡辺友子、北館まりや、我満可奈子、川上

亜希子、後藤あき子、中村康香、切迫早産
妊婦の入院中の体験～ストレスを軽減する
看護の検討～、第30回宮城母性衛生学
会学術集会、2009.10.25、仙台

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 康香 (NAKAMURA YASUKA)

東北大学・大学院医学系研究科・助教

研究者番号：10332941

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：